
足元

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足元

【Nコード】

N5703H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

近頃村では夜道に足元に何かがまとまりついてくると話になっていた。ある男の子と女の子がそれが何か確かめに行くと。我が国に古くから伝わる妖怪を扱ってみました。

第一章

足元

近頃村の中で色々と言われていた。

それが何かという些細な話ではある。夜道を歩いていると何か
がまとわりついてくるように感じられるのだ。

「何かな、あれって」

「そうよね。何かしら」

皆それが何かわからず首を傾げるばかりだった。

「夜道歩いているとな」

「足元にまとわりついてくるのよね」

「それが鬱陶しくて」

皆口々に困惑した顔で言うのだった。

「もう何なのかな、本当に」

「気を取られて仕方ないのよ」

「それってさ。ひよっとして」

これは村の小学校でも話題になっていた。子供達も歩いていると
その足元に何からまとわりついてくることを感じ取っていたのだ。
皆それが鬱陶しくて仕方がないのだ。この日も教室の中でその話を
している。誰もがその足元にまとわりつくものが気になっているの
だ。

「妖怪かな」

「妖怪!？」

「そう、それじゃないの?」

皆でこんなことも話すのだった。

「お化けじゃないかな、本当に」

「お化けっていうけれど」

「まさか」

「いやさ、言われてるんだけれど」

ここで一人の男の子が言うのだった。丸坊主でやたらと目の大きな男の子である。

「夜に歩いていると足元にまとわりついてくる妖怪がいるんだって」

「そんなのがいるんだ」

「うん、すねこすりって言ってね」

「そういう妖怪がいるらしいよ」

「じゃあそれ？」

「それなの？」

皆それを聞いてそれなのかと思いだした。

「その妖怪が夜道にまとわりついてくるの？」

「だからなのかな」

「そうじゃないの？」

丸坊主の男の子はそれを聞いて考える顔で述べた。

「その妖怪がさ。悪戯して」

「そんなの嘘に決まってるじゃない」

おかつぱの女の子が男の子の言葉に笑って言った。

「お化けなんかいないわよ」

「じゃあ何だっというのさ」

「猫か何かに決まってるじゃない」

女の子は笑ってこう言い返した。

「そんなの。そうでしょ？」

「猫？」

「そう、猫」

女の子はそれだと言う。

「それに決まってるじゃない」

「いや、違うよ」

しかし男の子はそれを否定するのだった。

「絶対に猫なんかじゃないの」

「いいえ、猫よ」

しかし女の子は胸を張って告げた。

「だってさ。猫って足元にまとわりつくじゃない」

「それは知ってるよ」

男の子もそれは知らないわけではない。猫については。

「僕だって猫飼ってるしね」

「だったらそれに決まってるじゃない」

女の子は男の子が猫のことは認めてきたのを見て「こぞとばかりに仕掛ける。」

「そうでしょ？だったらそれよ」

「いや、それは違うね」

しかし男の子はまだ言うのだった。彼も引くつもりはない。

「それはね。絶対に違うよ」

「違うっていうのね」

「大体さ。猫って皆の家にそれぞれいるじゃない」

「ええ」

猫は家につくものである。それなら家とその周りを歩き回るのが普通である。そこが縄張りになる。縄張りを離れて生きる猫はいないのだ。

「けれどさ。足元にまとわりつくのって村全体じゃない」

「猫って村全体にいるじゃない」

「村の外れにも？」

男の子はまた女の子に言い返す。今度はこのことだった。

「いるっていうの？それじゃあ」

「それは」

女の子もこう言われると戸惑ってしまった。

「野良猫とか野良犬は見つかったら」

「全部村長さんのところに連れて行くじゃない」

「それはそうだけれど」

そうしてそのうえで村長の家の犬や猫となるのである。この村の村長は無類の動物好きであり野良犬や野良猫を放っておけないのである。

「じゃあ」

「そうさ。野良猫でもないよ」

男の子はまた断言した。

「だからだよ。間違いなく妖怪だよ」

「そのすねこすりだっていうのね」

「そういうこと」

男の子の断言は続く。

「間違いはないよ」

「そうかしら」

だが女の子はそれでも疑問の言葉を出すのであった。

第二章

「本当に妖怪かしら」

「あつ、まだ疑ってるんだね」

「絶対に違うと思うわ」

女の子もムキになっていた。あくまでこう言って引かない。

「お化けなんていないわよ、絶対に」

「じゃあ確かめてみる？」

男の子もまたムキになっていた。

「ここは。それでいい？」

「ええ、いいわよ」

女の子も引けない。受けて立った。

「それじゃあ。何時見に行くの？」

「今晚だよ」

男の子は最早思い立ったが吉日だった。

「今晚でいいよね」

「今晚って」

だが女の子はここで男の子の提案に戸惑った顔を見せるのだった。

「いきなりなの？」

「そうだよ。江美ちゃん今日算盤塾だよね」

「ええ」

「それで僕剣道」

二人共習い事をしているのである。小学生の常と言っていい。

「その帰りに丁度いいじゃない。道だって同じだしね」

「それじゃあ今日なの？」

「そうだよ。若しかして嫌なの？」

「そ、そんな訳ないじゃない」

戸惑いを必死に隠しながら言い返した言葉である。

「それよりも牧男君こそよ」

「僕が？」
「そうよ。剣道よね、今日」
「うん、そうだよ」
はつきりと江美に答えた。
「そうだけれど」
「じゃあ丁度都合がいいわね」
江美もまた言うのだった。
「それじゃあよ。今夜よ」
「その妖怪を確かめるんだよね」
「そういうことよ」
もうそれで決めてしまった江美であった。
「いいわね、それで」
「望むところだよ。ただ」
「ただ。何よ」
「若しも猫じゃなかったらどうするの？」
「楽しそうに笑って江美に問うのだった。」
「猫じゃなくてすねこすりだったら。どうするの？」
「どうするのって」
「そう言われると困った顔になる江美であった。」
「そう言われても」
「僕はあれだよ」
「牧男は楽しそうに笑ったまま江美に話し続ける。」
「江美ちゃんの言うこと何でも聞いてあげるよ」
「何でも？」
「そうよ、何でもね」
「こっ彼女に言うのだった。」
「聞くよ。若し猫だったらね」
「そうなの」
「そうだよ。それじゃあ江美ちゃんはどうするの？」
そしてまた江美に問うのだった。

「若し猫じゃなかったら。どうするの？」

「そうね。じゃあその時は」

とりあえず少し考えてそのうえで。答えたのだった。

「同じこととしてあげるわ」

「同じことって？」

「だからよ。牧男君の言うこと何でも聞いてあげるわ」

こう牧男に返すのだった。

「何でもね」

「その言葉嘘じゃないよね」

牧男はここで江美にまた問うてきた。

「その言葉。嘘じゃないよね」

「私は嘘は言わないわよ」

江美は牧男の言葉をしつこく感じたので少しむっとした顔になって返した。

第三章

「絶対にね」

「本当だよね」

「本当よ」

さらにしつこく感じたので言葉にまでそれが宿る。

「神様と仏様に誓ってね」

「言ったよね、今ちゃんと」

そしてまた問うてくる牧男だった。

「僕の言うこと何でも聞くって」

「だから言ったわよ」

いい加減江美も腹が立つてきていた。

「それともまた言おうかしら。何度でも耳元で言っただげるわよ」

「あつ、もうわかったから」

牧男もこう言われるとやっと静かになった。

「聞いてくれるんならそれでいいよ」

「わかってくれたらいいわ。それじゃあね」

「うん、それじゃあ今夜ね」

「そうよ。確かめるわよ」

こうしてその日の夜二人でそれぞれ算盤と剣道の帰りに待ち合わせる事になった。江美が算盤塾の授業を終えて外に出るとだった。剣道着を着て竹刀が入った袋を持っている牧男がその塾の入り口に一人で立っているのだった。剣道着は上も下も紺と黒という暗めの色なので夜の中では見えにくかった。

「あれっ、待っていてくれたの？」

「それ言わなかったっけ」

「聞いてないわよ」

こう返す江美だった。かなり驚いた顔で。

「今はじめて聞いたけれど」

「あれっ、そうだったっけ」

「そうだったっけじゃないわよ」

しかし江美の言葉は続くのだった。

「確か私が剣道場に行くって話だったじゃない」

「けれどそれだったら江美ちゃんが待たないといけないじゃない」

しかし牧男も牧男でこう言い返す。

「女の子待たせるのってよくないよ」

「そんなの気にしないわよ」

江美は何を言ってるのよ、と顔にはつきり出してそのうえでまた言った。

「それに隣同士だし」

「剣道が終わる方が先だからいいじゃない」

しかしそれでも牧男は言うのだった。

「そうでしょ？先着順でね」

「先着順って」

言葉の使い方が違うと言いたかったがどうにも言いそびれてしまった。

「それは」

「まあまあ。とにかく」

話は牧男のペースになっていた。

「行こうよ」

「行こうよって？」

「だから。すねこすりを探しにだよ」

彼が言うのはこのことだった。

「約束じゃない。確かめに行くって」

「それはそうだけれど」

元々その為に待ち合わせている。だからこれは言うまでもない」とではあった。

「けれど」

「まさか気が変わったとか？」

そしてまた牧男が言うのだった。

「そういうのじゃないよね」

「違うわよ」

ここでもまたムキになってしまふ江美であった。

「それはないから」

「じゃあいいじゃない」

それを聞いて何故か笑顔になる牧男だった。

「それだったら。じゃあいいよね」

「ええ」

成り行きのように頷く江美であった。

「わかったわ。それじゃあね」

「それじゃあ夜道を歩いていくけれど」

「ええ、二人でね」

「行こう」

また牧男の方から誘ってきた。

「それじゃあ。江美ちゃんの家までね」

「そこまでで何か足元にまわりついてきて」

そもそも話の発端も言っただけ確認するのだった。

「それが猫だったら」

「僕が江美ちゃんの言うことを何でも聞いて」

「そうよ」

そのことを牧男に対して強調してもきた。

「それはいいわね。わかったわね」

「わかってるよ」

そして牧男もにこりと笑ってそれに頷いてみせる。

第四章

「約束したしね」

「じゃあいいわね」

「けれどさ」

しかしここで牧男もまた言うのだった。

「すねこすりだった場合はだよ」

「ええ、わかってるわよ」

江美は憮然として答える。

「牧男君の言うこと何でも聞いてあげるわよ」

「きつとだよ」

牧男はこのことを強調してきた。

「きつとだよ、絶対だよ」

「わかってるわよ」

牧男があまりにもしつこいので少し頭にきてもいた。

「わかったから何でそんなに言うのよ」

「まあちよつとね」

牧男はここでは何か思わせぶりに笑うのだった。

「色々よね。確かめたくてね」

「何も確かめるものなんてないじゃない」

江美は牧男が何を言いたいのかわからず苛立ちを顔に見せて述べた。

「そんなの。違うの?」

「いいから。ともかくよ」

江美はここで話を変えてきた。というよりは元に戻してきた。

「これからだけけれど」

「うん、行くっ」

牧男の方から誘ってきた。江美の機先を制したのだった。

「それじゃあ」

「わかったわ。じゃあね」

こうして二人で向かうのだった。二人は横に並んで夜道を進んでいく。暫くしてだった。その足元に何かまとわりついてきたのを感じたのだった。

「来たみたいだね」

「そうね」

二人で顔を見合わせて言い合う。

「そのすねこすりかね」

「猫よ」

二人はここでも言い合った。

「猫に決まってるじゃない、そんなの」

「だからすねこすりなんだって」

江美も牧男も力説する。

「妖怪なんている筈がないのに」

「いるって。絶対に」

こうした話にもなるのだった。

「賭けてもいいよ」

「だから賭けてるじゃない」

江美はこれまた身も蓋もない突込みで返した。

「そうでしょ？今実際に」

「それもそうか。そうだったよね」

「そうよ。とにかくよ」

「うん」

「見てみるわよ」

話をそこに戻すのだった。

「足元。いいわね」

「うん、じゃあ」

こうして二人で足元を見る。するとそこにいたのは。

垂れ耳で白い毛をしていてあちこちに黒と茶のぶちがある。尻尾はあまり長くはない。そして丸い顔をしていて短い足が四つある。

そういう生き物であった。

「ほら、これってあれよ」

江美はその生き物を見てから顔をあげて牧男に言ってきたのだった。

「猫でしょ？これって」

「猫ってこれが？」

「そうよ。猫じゃない」

江美はここぞとばかりに言う。

「これって。そうでしょ？」

「いや、違うよ」

しかし牧男はそれは決してそうではないと主張するのだった。

「それはね。絶対に違うよ」

「何がよ」

だが江美はそうではないと言うのだった。

「何処がよ。これって絶対に猫じゃない」

「猫って？これが？」

「ほら、垂れ耳で」

その生き物の耳を指し示しての言葉だ。

「これが何よりの証拠よ」

「垂れ耳の猫なんているの？」

「スコティッシュフォールドよ」

「何それ」

それは牧男が全く知らない名前の猫であった。名前を聞いても目を丸くさせている。

「聞いたことないけれど」

「あれっ、知らないの？」

「うん、何それ」

その丸くさせた目で江美に尋ねるのだった。

「その猫って。何なの？」

「だから。垂れ耳の猫なのよ」

江美の説明はかなりわかりにくいものである。しかしそれでもそれは子供らしいものではあった。

第五章

「それなのよ」

「そんな猫がいるんだ」

「いるのよ。だからそれなのよ」

「こう言うのである。」

「これは」

「けれどさ。猫ならね」

しかしここでまた牧男は言うのだった。

「何で草を食べてるの？」

「えっ!?!」

江美は今の牧男の言葉を聞いて驚きの声をあげた。

「草って？」

「猫ってお魚とか鼠を食べるじゃない」

誰もが知っている猫の食べ物である。

「けれどさ。ほら、あれ」

「あれ？」

牧男が指差した方を見る。見ればそこにもその猫に似た生き物達がいる。彼等はそのこに集まってそのうえで何とよもぎやおおばこを食べているのである。

「ああしてよもぎとかおおばこか食べる？」

「食べないわよ」

すぐに答える江美であった。

「そんなの。よもぎとかおおばこなんて」

「じゃあ猫じゃないよね」

牧男はここぞとばかりに満面に笑みを浮かべて述べたのだった。

「これって絶対」

「そうね」

江美は残念そうに牧男に答えた。

「そうなるわ。これはね」

「じゃあ僕の勝ちだね」

牧男はここぞとばかりににこにことして江美に声をかけてきた。そうして。

「じゃあ。約束だけれど」

「わかってるわよ」

笑みは憚然として牧男にまた答えた。

「約束よね」

「そうよ。それだけれどね」

「それで何をすればいいの？」

かなり憚然とした顔で牧男に問う。

「私。何をすればいいのよ」

「これからも一緒に帰ろう」

牧男の言ったことは意外なことであった。

「一緒にね」

「一緒について？」

「学校の帰りもこうした塾とかの帰りも」

どちらもなのだった。

「後学校行く時もいつも一緒にね」

「一緒になの」

江美はそれを聞いてまずは目をしばたかせるのだった。

「何よ、それって」

「嫌なの？」

「嫌じゃないけれど」

それはそうではないと言いはする江美だった。いささか憚然とした声ではあったが。

「それはね。違うわ」

「そう、よかった」

「よかったって何がよ」

また牧男の言葉に対して問い返した。

「よかつたつていうのは」

「あつ、何でもないよ」

しかしその言葉には答えない牧男だった。

「それはね」

「あまりそうは思えないけれど」

そしてそれを素直には信じない江美だった。

「そもそも何で私と行き帰りいつも一緒にいたいなのよ」

「だから何でもないつて」

「それが嘘でしょ」

あくまでこう問い詰めていくのだった。

「それ自体が」

「嘘じゃないつて」

「嘘よ。素直に言ったら？」

牧男を問い詰める言葉に棘がこもってきた。

「どうして私と一緒に帰りたいのよ。それはどうしてなのよ」

「まあちよつとね」

やはり言おうとしない牧男だった。照れ臭そうに笑いながら。

「ちよつと。そうしたいから」

「そうしたいからつて」

「それだけだから。それよりもそれでいいよね」

また逆に江美に問うてきたのだった。

「行き帰りもずっと一緒に」

「それはわかつてるわよ」

無然として答えはする江美だった。

「それはね。それじゃあ」

「有り難う。じゃあこれからもずっと一緒にだよ」

「全く。妖怪が本当にいたし」

またそのすねこすり達を見る。彼等は何でもないように相変わらず二人の足元にまとわりついてきていて草を食べ続けているのだった。

「牧男君と行き帰りも一緒だし」

「そう？僕は凄く満足してるよ」

相変わらず陽気に笑っている牧男だった。

「江美ちゃんと一緒にいられるんだから」

「まあいいわ」

江美はまだ気付かないがそれでも言いはした。

「一緒でね。いいわ」

「有り難う」

最後に微笑む牧男だった。二人はそのまま二人で歩きはじめた。

江美はまだ気付いていないがそれでも牧男が握ってきた自分の手から伝わる感触を感じ取っていた。足元にはすねこすりのまわりつくものを。そうしたものを感じながらそのうえで二人で歩きはじめたのだった。

足元 完

2009・5・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703h/>

足元

2010年10月8日15時58分発行